

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月2日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820013

研究課題名（和文）ドイツ語における定性・不定性表現の通時的研究

研究課題名（英文）Diachronic investigations of (in)definiteness expressions in German

研究代表者

西脇 麻衣子 (NISHIWAKI MAIKO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員

研究者番号：60613867

研究成果の概要（和文）：ドイツ語は名詞の表す対象の定性・不定性が語彙的に明示される言語であるが、本研究では、この定性・不定性という観点から複数の個別的言語現象を特徴づけた。具体的には、ドイツ語の存在構文「es gibt+対格名詞句」の文法化と対格名詞句の定性・不定性との関わり、古高ドイツ語の修飾的属格名詞の定性・不定性とその主要部名詞に対する前置・後置との関係、及び話法の助動詞 *sollen* のモダリティ解釈と主語の定性・不定性との相関について明らかにした。定性・不定性というカテゴリーはドイツ語の意味的・統語的特徴に新たな視点を与えるものであることがわかった。

研究成果の概要（英文）：In the German language, the (in)definiteness of the objects indicated by noun phrases is expressed lexically. In this study, the following three linguistic phenomena were discussed and explained in terms of their (in)definiteness: The relation between the grammaticalization of the German existential construction “*es gibt* + accusative noun phrase” and the (in)definiteness of this noun phrase, the correlation between the (in)definiteness of the attributive genitive in Old High German and its pronominal/postnominal position relative to the head noun, and the relation between the modal verb *sollen* and the (in)definiteness of the sentence subject. These investigations have suggested that the nominal category of (in)definiteness can give a new perspective on the semantic and syntactic features of the German language.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：独語学、古高ドイツ語、修飾的属格、存在構文、文法化、情報構造、主語、話法の助動詞

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語は現代の大半のゲルマン語系言語と同様、定冠詞と不定冠詞をもつ言語であ

る。これは、現代ドイツ語では、名詞の表す対象の定性・不定性を語彙的にマークすることを示している。定性とは、特定可能あるい

は限定可能であることと定義できる。定性は語彙や形態素によって明示されるだけではない。語順や、本来は定性とは別の(文法的)意味を担う文構成要素によって名詞句の表す対象が定であるとみなされることがある。これを定性の効果とよぶ。不定性の効果についても同様である。すなわち、名詞句の統語的「環境」がその名詞句の指示対象を不定と解釈させる。

ドイツ語の定冠詞・不定冠詞の成立・発展に関する研究は少なくないが、各々の見解にはしばしば違いがみられる。また、定性・不定性の特徴を扱った研究は、英語が主流であり、ドイツ語を対象とした研究は非常に少ない。そのため、本研究では、ドイツ語における複数の言語現象において、定性・不定性の特徴がどのように現れているかを解明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、ドイツ語の意味的・統語的特徴を定性・不定性という観点から考察することを目的とした。具体的には、以下の3点を課題とした。さらに、それらの分析を通じて定性・不定性の定義を再検討することも目指す。

(1) ドイツ語の存在構文「es gibt+対格名詞句」では、対格名詞句が不定のものを表すことが圧倒的に多い。したがって、この構文は不定性の特徴をもつと言える。この構文は、「与える」を意味する他動詞 geben からいくつもの文法化プロセスを経て成立し、専ら16世紀頃から使われるようになったとされるが、この文法化の過程は、不定性効果とどのように関わっているか。また、対格名詞句が定のものを表す例も散見されるが、これはどのように説明することが可能だろうか。

(2) 現代ドイツ語では、主要部名詞の前に置かれる修飾の属格は定冠詞と相互排他的である。これは、主要部前置の属格が定冠詞と同じようなはたらきをもっていることを示唆している。現代ドイツ語の属格が専ら主要部の後に置かれ、主要部の前に置かれるのは固有名詞と代名詞に限られるのに対し、古高ドイツ語では、修飾の属格は主要部の前に置かれる方が一般的である。Oubouzar (1997)が述べているように、属格が主要部に後置されるようになった主な要因は、古高ドイツ語期における定冠詞の成立に帰せられるとすると、主要部前置の属格は、定冠詞の定着がまだ完了していなかったとされる古高ドイツ語期には、定冠詞の機能と重複するはたらきをもっていたと考えられる。用法が多岐にわたっていた古高ドイツ語の属格が、語順の違いによって、定性・不定性の特徴を表しているかどうかを検討する。

(3) 話法の助動詞の解釈(認識的モダリティ表現か否か)に影響を与える文要素には、本動詞のAspectや主語の人称が関わっていることが先行研究から知られているが、次の例は、主語の定性・不定性も助動詞のモダリティ解釈と相関関係があることを示唆している。(a) Ich gehe mal **ein** Buch kaufen. **Das** Buch soll von japanischer Kultur handeln. (b) Ich gehe mal **das** Buch kaufen. **Das** Buch soll von japanischer Kultur handeln. いずれの例も、2番目の文の主語は定冠詞を含んでいるが、主語の名詞句の指示対象は、(a)では、前文の不定の目的語(ein Buch)であり、話法の助動詞 sollen は根源的(root/deontic)と解釈される。これに対し、(b)では、定の目的語(das Buch)が、2番目の文の主語の指示対象であり、話法の助動詞は認識的(epistemic)と解釈できる。当課題では、上の例が示すように、主語の定性と認識的モダリティ、及び主語の不定性と根源的モダリティとの間に相関があるかどうかを新聞コーパスを用いて統計的に調査し、さらに、相関関係が生じる理由について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、主として用例の調査と二次文献資料の検討から構成されている。理論的な考察が最終目標であったが、テキストの分析やコーパス資料などの統計的データを活用し、理論の裏付けを目指した。

研究初年度の2011年度は、es gibt 構文の不定性効果について(前項「2. 研究の目的」の(1))、研究を行った。まず、この構文、また、同様に不定性効果のみられる英語の存在構文「there is/are+名詞句」に関して先行研究を網羅的に検討し、ゲーテとトーマス・マンのデータベースから、散文作品におけるes gibt 構文のコーパス調査を行った。その結果は、8月にミュンヘン大学で行われたサマーアカデミーのワークショップで口頭発表した。その後は、Fischartの作品Geschichtsklitterungの分析を通じてes gibt 構文が使われ始めたと言われる16世紀の状況、及びオンライン・コーパスを用いて現代の状況を統計的に調査して内容を補完し、論文として発表した。

研究次年度の2012年度は、話法の助動詞sollenのモダリティ解釈と主語の定性・不定性との相関について研究を行った。前項「2. 研究の目的」の(3)に挙げた例を出発点とし、新聞コーパスの調査を通じて、主語の定性と認識的モダリティとの相関関係を明らかにした。この結果について、5月にミュンヘン大学で開催された国際研究集会「ドイツ語のモダリティ」で口頭発表を行った。その後、発表の際のコメントを考慮し、さらに、

コーパス調査結果を追加して、論文としてまとめた。この論文は研究集会の論集に掲載される予定である。

また、2年間の研究期間を通じ、古高ドイツ語の修飾的属格の主要部名詞に対する語順とその定性・不定性の効果についても（前項「2. 研究の目的」の（2））、『オトフリートの福音書』（9世紀前半）の分析を行い、論文としてまとめ、発表した。

4. 研究成果

本研究の目的とした上記の課題3点に関し、以下の成果が得られた：

（1）es gibt 構文の不定性効果について：

es gibt 構文の対格名詞句が不定のものを表すことが非常に多いことは、先行研究から知られていたが、文学作品のコーパス調査によって、通時的に確認することができた。

先行研究を参照すると、この構文は「与える」を意味する他動詞 geben から4つの文法化プロセスを経て成立した。geben には「もたらす、生じさせる」という語義もあるが、この用法は、 $X_{\text{動作主}} \text{ gibt } Z_{\text{受け手}} Y_{\text{主題}}$ という構文が $X \text{ gibt } Y$ という構文へと拡張した結果である（Lenz 2007）。 $X \text{ gibt } Y$ では、 X がもととなり Y が生じるという X と Y の間の因果関係が表現されていると言える。

Behaghel (1923)によれば、es gibt 構文は、主語の代名詞 es の指示対象に二通りの解釈が可能であるような文脈、すなわち、es が先行する中性名詞を受けているとする読みだけでなく、先行文で表されている状況を指しているとする読みも可能な文脈で成立したという。

es gibt Y は、 Y の生起が表されている点で起動相的である。初期新高ドイツ語期の作品 Geschichtsklitterung ではこの構文は生起の意味に用いられ、単なる存在表現に使われていることはほとんどない（Newman 1998）。一方、新高ドイツ語ではこの構文はまず第一に存在表現であるといつてよい。es gibt Y の意味は Y の生起を表す起動相的意味から Y の存在を表す継続相的意味へとシフトしたと言える。

新しく生じるものは文脈上の新情報とみなし得る。これが、es gibt 構文が不定性効果をもつ理由であると考えられる。情報構造の観点から見ると、この構文では「～がある」という事態そのものが焦点化されている。

一方、対格名詞句が定のものを表す場合、焦点となっているのは文全体ではなく、すでに文脈に導入済の対象を指している定の対格名詞句であると考えられる。

通時的な言語データが示唆するように、es gibt 構文が定の名詞句と共起することができる段階、すなわち、二つの焦点構造をもつ

ようになった段階はこの構文の文法化がさらに進んだ段階であると言える。

本研究課題では、不定の名詞句と結びつくことの多い es gibt 構文がなぜ定の名詞句とも共起することができるかという問いに対し、情報構造の観点から一つの答えを示した。

（2）古高ドイツ語の修飾的属格の主要部に対する位置と定性・不定性効果について：

先行研究では、古高ドイツ語期における主要部前置の属格は定冠詞と同等の機能、すなわち、定性を表すはたらきをしていたと考えられている。このテーゼを出発点とし、古高ドイツ語期の韻文作品『オトフリートの福音書』を分析した結果、主要部前置の属格が定性表現に関与しているという明らかな根拠は見い出せず、属格の主要部名詞に対する位置の違いは、定性・不定性の違いというよりもむしろ、属格部分と主要部名詞から成る複合名詞句全体の文中での情報構造を反映しているのではないかという結論を得た。

『オトフリートの福音書』の第一巻における複合名詞句の約半数は、二つの語が「属格＋主要部」あるいは「主要部＋属格」の語順で結びつけられているタイプである。このタイプの複合名詞句は、語順の違いに依らず、属格名詞の意味が主要部名詞の意味を限定し、合成語に近いと言える。

次に数の多い複合名詞句のタイプは、第一番目のタイプに定冠詞がついたものであるが（21%）、この定冠詞は、「属格＋主要部」/「主要部＋属格」全体に対し、定性を表示したものであり、第一番目のタイプと同様、合成語的である。

その次に頻度の高いタイプの複合名詞句は属格部分に定冠詞が含まれるものであるが（12%）、このタイプは、属格部分が主要部名詞に前置する場合と後置する場合とでは、情報構造上の違いが観察できる。主要部前置の属格部分が表す対象は、聞き手（あるいは読み手）にとって既知の情報であり、この既知の対象に関して、主要部の表すものについて何かが述べられる。言い換えれば、属格部分は、文におけるトピックの役割と類似している。

これに対し、主要部に属格が後置される場合、複合名詞句全体の表す対象が文の中で焦点となっていると考えられる。すなわち、属格の語順が複合名詞句の文中での焦点化を標示することが明らかとなった。

（3）主語の定性と認識的モダリティとの相関について：

「2. 研究の目的」の（3）に挙げた例が示唆するように、主語の定性と話法の助動詞 sollen の認識的モダリティとは相関関係があることが、新聞のコーパス調査から統計的

に明らかになった。ここでの「定性」とは、主語が定冠詞を含んだり、あるいは人称代名詞であったりするような、かたちの上での定性というよりもむしろ、主語の示す対象が聞き手にとって特定可能であることを意味している。

一方、その表す対象が文脈上特定できないような主語は、根源的モダリティとも認識的モダリティとも相関がないことがわかった。

sollen が認識的モダリティ表現である場合、この助動詞は、命題の内容が第三者によってもたらされた情報であることを表すが、このとき、文の主語が典型的にトピック（聞き手にとっての既知の事柄）であるが故に、主語の定性と認識的モダリティとの相関関係が生じるという、情報構造上の観点からの理由づけが可能であると考えられる。

本研究は、複数の個別的な言語現象を定性・不定性という視点から統一的に捉えようとする試みであった。このようなアプローチの仕方は、個々の言語現象の扱っただけからは見通しの困難なドイツ語の特性を明らかにすることができると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Maiko Nishiwaki: “Zur distributiven Funktion des pränominalen und postnominalen Genitivs im Althochdeutschen - am Beispiel von Otfriids Evangelienbuch -”, Neue Beiträge zur Germanistik (日本独文学会欧文誌)、Band 11 / Heft 1, 2012 年、pp.172-187、査読有
- ② 西脇麻衣子: 「存在文と(不)定性表現 - es gibt 構文の文法化を手がかりに -」、エネルギー (ドイツ文法理論研究会機関誌)、第 37 号、2012 年、pp. 33-50、査読有

[学会発表] (計2件)

- ① Maiko Nishiwaki: “Modalverben und der Ausdruck von (In)Definitheit - unter besonderer Berücksichtigung von *sollen* -”, 研究集会 “Modalität im Deutschen”, 2012 年 5 月 10 日、ミュンヘン大学 (ドイツ)
- ② Maiko Nishiwaki: “Existenzsätze und der Ausdruck von (In)definitheit - anhand der *es-gibt*-Konstruktion im Deutschen -”, 研究集会 “Japanisch-

deutscher Workshop Linguistik: Grammatische Strukturen des Japanischen und Deutschen im Vergleich”, 2011 年 8 月 17 日、ミュンヘン大学 (ドイツ)

[図書] (計2件)

- ① Werner Abraham & Elisabeth Leiss (編): Funktion(en) von Modalität im Deutschen, de Gruyter, 2013 年中刊行予定 (収録論文: Maiko Nishiwaki: “Modalverben und die (In)Definitheit des Subjekts - unter besonderer Berücksichtigung von *sollen* -”, 総頁数 21)、査読有
- ② 日本独文学会編: Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft, iudicium, 2013 年、(収録論文: Maiko Nishiwaki: “Zur Unifizierung der semantischen Funktionen des deutschen Genitivs”, pp. 134-152)、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西脇 麻衣子 (NISHIWAKI MAIKO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号: 60613867